



USA・コード

～ 神仏習合

小池楓生子

目次

一. 転害会（てがいえ）

二. 宇佐神宮参拝

三. 本地垂迹説（ほんじすいじゃくせつ）

四. 弥勒寺の仏像たち

五. 宇佐の神仏習合

六. 大分県立歴史博物館

主要参考文献など

一. 転害会（てがいえ）

ロマン豊美は、奈良市に住むイタリア系ハーフの中学3年生。中高一貫の学校に通っているので、中3といっても受験生ではない。

だから今年の夏でハンドボール部を引退した後は、以前から好きだった宗教美術の世界にはまっている。

中3にして宗教美術なんぞに興味を持ったのは、テレビで放映されていた映画『ダ・ヴィンチ・コード』を観て以来。この映画は何でも2006年に世界で大ヒットしたらしく、日本でも話題作だったようだ。

ベテラン俳優であるトム・ハンクスが、主人公ロバート・ラングドンというハーバード大学の宗教象徴学教授を演じるアメリカ映画。殺人事件も起きるサスペンス物なのだが、ストーリーの中心はイエス・キリストにまつわる謎解きだ。

映画はパリのルーブル美術館やロンドンを舞台としており、モナ・リザをはじめとする芸術作品や有名な建築物が、物語の中で次々に登場する。歴史的文書の内容も物語に盛り込まれ、まさに知的エンターテインメントの結晶と言っていい。

世界で記録的な興行収入をあげた映画だが、現存する遺跡や資料も登場するものだから、宗教的物議をかもしてカトリック教会から批判を受けてもいる。生涯独身であったはずのイエス・キリストが、実は結婚して子供もいたというあらすじになっているのだから。豊美からすればあくまでフィクションとして楽しめばいいと思うのだが、教会側からするとそういう訳にもいかないのだろう。

『ダ・ヴィンチ・コード』は、ダン・ブラウンという作家が書いた小説を基に映画化されたものだ。映画をいたく気に入った豊美は、文庫化された小説も読んだ。さらにはラングドン教授シリーズの小説を、ダン・ブラウンの執筆順に、『天使と悪魔』『ロスト・シンボル』『インフェルノ』『オリジン』と読み進め、そのたび美術とサスペンスを絡めたストーリーに夢中になった。

ラングドン・シリーズの魅力は、何といっても重層性がありながら、読者を大どんでん返しの結末に導くストーリー。そして、テーマの建築物や芸術作品に隠された謎を解き明かしていくワクワク感。よく知られている絵画や建築作品が実は暗号の一部だったという驚きが、私達を興奮に引き込んでいく。

『ロスト・シンボル』はワシントンが舞台だから、遡る歴史は深くはない。しかし、『天使と悪魔』はローマのバチカン市国というカトリックの歴史そのものを扱い、さらに核エネルギー類似の現代科学もテーマに取り入れている。豊美の父の故郷でもあるローマが舞台ということで、DVDを借りて映画化されたものも観て、ハラハラドキドキを楽しんだ。

『インフェルノ』に至っては、同じイタリアのフィレンチェからヴェネチア、トルコのイスタンブールの諸歴史的遺跡を舞台としながら、ダンテの『神曲』もモチーフとなっている。そして、地球上の人口爆発を抑える病原菌まで登場させて、物語は重厚性を増した。

今年発刊された『オリジン』は、スペインが中心舞台。バルセロナにある、ガウディの未完成作サグラダ・ファミリアなどの建造物もちろん登場する。そして進化論や、さらには人工知能という近未来的科学までテーマとされていた。

豊美は、そのうちダン・ブラウンは日本の京都・奈良を舞台に、とんでもなく面白い小説を書いてくれるのではないかと密かに期待している。

ダン・ブラウンがラングドン教授を奈良に登場させる前に、という訳ではないけれど、豊美は自分が住む奈良の宗教美術にも興味を持ち始めた。日本の宗教美術といえば、もちろん仏教美術が中心となるだろう。

豊美は、奈良市内の名所旧跡はもちろん、県内の寺社仏閣巡りも開始した。京都とともに日本の古都と呼ばれる奈良。さすが、国宝や重要文化財にあふれている。

市内の奈良公園内にある東大寺は、そんな豊美のお気に入りの一つ。

東大寺は、奈良時代に聖武天皇によって建てられたお寺。『奈良の大仏』として知られる盧舎那仏（るしゃなぶつ）を参拝しようと、修学旅行生だけでなく、海外からの旅行客も本当に多い。

大仏も大仏殿も国宝に指定されているが、同じく国宝である南大門と、そこに安置されている金剛力士像も見物客に人気だ。金剛力士像は、鎌倉時代の仏師・運慶や快慶たちが、わずか69日間で作りあげたと教科書にも紹介されている。

境内の東の方、若草山へ向かうふもとにある国宝・法華堂は、仏教美術の愛好家がよく足を運ぶ所。これまた国宝の不空羂索観音（ふくうけんさくかんのん）を中心として、数体の仏像が安置されている。以前は、豊美が大好きな国宝である日光・月光菩薩もここに置かれていたが、現在では南大門近くに建設された東大寺ミュージアムに移されている。

法華堂の横に建つ二月堂も国宝。『お水取り』とも呼ばれる修二会が行われる建物で、毎年3月の会期間に豊美は必ず来て、ご利益に甘んじている。

境内奥の方にある戒壇院に安置されている国宝の四天王像も、仏像ファンには垂涎もの。

ほかにも東大寺には数々の国宝や重要文化財があり、古都奈良の文化財の一部として、ユネスコから世界遺産に登録されている。

中学生が仏像好きだなんて皆から引いてしまわれそうだが、よく見ると結構似たような人はいるもんだ。同じ奈良では、『仏像新聞』まで発行している女子生徒が全国でも有名になっている。仏像ブームを引き起こした『見仏記』のイラストレーターみうらじゅんさんに至っては、小学生の頃から仏閣巡りをして、それをみごとな旅行記に残していっしょ。

そして今朝、豊美は東大寺の転害門（てがいもん）に来ている。観光客の多い南大門から大仏殿に向かうルートから外れて、かつ朝の時間帯なので、まだ辺りに人は少ない。

10月5日、転害会（てがいえ）といわれる東大寺の年中行事があるとのことで、やってきたのだ。平日だから、いつもなら学校にいる時間だが、先日の体育祭の振替休日ということで今日は休校という訳である。

この転害門も国宝の建造物で、東大寺境内の西北、正倉院の西側に建つ堂々とした門だ。11

80年、平重衡（しげひら）による焼き討ちにより大仏殿をはじめとする東大寺伽藍の大半が消失したが、転害門は残っている。

今日の転害会では、東大寺境内にある手向山（たむけやま）八幡宮で神事を行った後、転害門に場所を移し、神輿を迎える神事や東大寺の僧侶による法会などが行われるということだ。そして転害会にあわせて、境内の勧進所（かんじんしょ）にある八幡殿では、国宝の僧形八幡神坐像が特別拝観できる。

ちょうど休校日で東大寺のこんな年中行事を見ることができなんて、仏教美術ファンにとって何と幸運なことか。豊美はワクワクしながらやってきたところだった。

どこからともなく現れた一人の女性が、ニコニコしながらいきなり豊美に話しかけてきた。年の頃は40歳くらいか。小柄な体形で髪はショートカット、快活な雰囲気の人だ。

「9時半から手向山八幡宮でお祭りがあって、ここの門に移動してくるのは11時半くらいよ。まずは、八幡宮に行きましょう。」

「そうなんですか、じゃあ。」

豊美は、東南の方向、東大寺境内で転害門から対角線上の反対の方向にある手向山八幡宮に向かって、その女性と歩き始めた。

「まだ若いのに転害会めがけて来ているなんて、渋いわね。」

歩きながら女性は笑顔で言うが、豊美のことを褒めているのかおちょくっているのか、よく分からない。

「でも、どうして手向山八幡宮と転害門が関係しているのか、どうして転害門で神輿を迎えるお祭りをするのか、分かる？」

「ん？」

豊美は、返答に詰まる。

考えてみれば、確かにそうだ。手向山八幡宮での神事の後に行われ、僧形八幡神も開扉されるということだから、転害会が八幡様に関係していることは間違いなさそうだ。でも、それがなぜ、この転害門で行わなければならないのか。

「ねえ、奈良時代に大仏が建てられる時、九州の宇佐八幡が協力したという話は知ってる？」

「ああ、そういえば、歴史で習った記憶があります。」

女性の質問に誘導され、豊美は次第に話に引き込まれていく。

「そう、教科書にも書かれていたかしら。」

奈良の天平年間、745年に、聖武天皇の呼びかけによって大仏は作られ始めたのだけど、そのためには銅やすずなどの金属が大量に必要なだったの。

天皇は、疫病や社会不安から国を護るための大事業として大仏製作に取り組んでいたけれど、当然たくさんの費用が必要になってくる。当時、まだ仏教を信仰していなかった貴族たちから、反対意見が出るかもしれない状況だったのね。

そんな時、宇佐の八幡神から『われ天神地祇を率い、必ず成し奉る』という協力のお告げがあったの。八幡神は天の神、地の神を率いて、必ず成功させるというのだから、聖武天皇にとってこれほど心強いことはないわね。

実際、大仏に塗る金が不足すると、金は必ず国内から出ると八幡様はお告げをして、やがて陸奥の国から金が献上されてきたりもしたの。」

「へえ。」

「そして大仏が作られた直後の749年、宇佐の八幡神とお供の女の神職が、大仏にお参りするために紫の輿に乗ってこの転害門をくぐったのね。これが神輿の始まりとされているの。」

「なるほど。」

「その時、八幡神が来るみちみち殺生が禁止されて、転害門では大勢の僧侶たちが出迎えたらしいわ。東大寺では、天皇たちも出席する中、僧侶5000人がお経を読んで、舞がふるまわれるなどの法要が賑やかに営まれたそうよ。今日の転害会は、その再現という訳ね。」

「そうだったんですか。」

「大仏が完成した後はね、八幡神は東大寺を護る神様として分霊されて、それが手向山八幡宮として祀られたの。当時、日本の都だった奈良の人々に対して八幡様は強い印象を与えて、国家の神としても第一歩を踏み出すことになったのよ。」

「へえ、お寺の中に神社があるって、何か変な感じがしていたんですが、そんな謂れがあったんですね。」

その女性の解りやすい解説に、豊美はひどく感心していた。

「うふふ、私がどうしてそんなことに詳しいか、不思議に思っているんでしょう。実はね、私、博物館の学芸員をしているの。」

そういつて、女性は名刺を差し出してきた。

「愚鈍（ぐどん）・蘭（らん）さん!？」

名刺には、確かにそう書いてある。

「ラングドンさん、ではなくて？」

「あら、『ダ・ヴィンチ・コード』も知っているようね。そう、私は愚鈍・蘭。よろしくね。」

本名なのかペンネームなのかは分からないが、小説の主人公ラングドン教授のファンである豊美に対して、まるで人を食ったような名前だ。おまけに、苗字は『愚鈍』とあるが、愚鈍どころかとても敏捷な女性のように見える。

そんな豊美の怪訝な表情をよそに、蘭さんは笑顔で続ける。

「さあ、そこが手向山八幡宮よ。」

手向山八幡宮前には、祭典に参加する神職だけでなく、僧侶までもがいる。神官とお坊さんが並んでいるのを見るなんて、初めてだ。

「手向山っていう響きに、何か思い出すことはある？」

「このたびは、ぬさもとりあえず、たむけやま、でしたっけ？」

豊美は、国語の授業で習った、菅原道真による百人一首の和歌を思い出す。すかさず蘭さんは、「紅葉の錦、神のまにまに。シュッ!」

と下の句を唱え、かるたを取る手つきまでする。どこまで調子の良い人なのか。

「この辺は紅葉の名所でもあるからね、菅原道真も歌を詠みたくなるほどの。まだ紅葉の季節に

は少し早いけれど。」

やがて行われた神事。雅楽が鳴る中、神官が食事やお酒などを供える、いたってオーソドックスな神事が古式ゆかしく取り行われた。

神事の最中には、神職だけでなく参列している僧侶も玉串を捧げ、二拝二拍手一拝の所作を行った。

「神仏習合、ですか。」

「そうね、見事にその瞬間ね。」

蘭さんも興味深げに見入っていた。

手向山八幡宮での神事が終了すると、

「ここから転害門まで、神輿がお渡りになるのよ。一緒に戻りましょう。」

と蘭さん。

「お神輿が重要文化財に指定されてから、ずっと仮の神輿が使われていたんだけど、去年、その模刻のお神輿が新調されたの。それを機会に、八幡宮から転害門までのお渡りが、50年ぶりくらいに今年から復活することになったんだって。」

さすがに蘭さんは、色々と詳しい。

「転害会の神事のうち、転害門で行われる分については雨の時は中止になるし、最近ではちょうど台風に見舞われて八幡宮の行事だけで終了ということも多かったのよ。

今年はこんなにお天気が良くて、よほど私の日頃の行いが良いのかしら。」

そう蘭さんはのたまうが、ここに参列しているのは蘭さんだけではない。豊美の行いが良いから、とも考えられる。

でも蘭さんにそこを突っ込んでもかわされそうなので、豊美は何も言わず、神輿の一行に連れ立って転害門へ向かった。

「この門は東大寺境内の西北側にあるんだけど、西北って縁起が良い吉祥の方向らしいの。だから、害を転じるという意味で、転害門と呼ばれるようになったんだって。」

改めて転害門を見ると、まるで神社のように大注連縄が懸けられてもいる。ここは寺院なのだが。

「ほら、門の真ん中には神輿を置くための石が据えられているわ。あの四つの石の上にお神輿を置くのね。」

蘭さんは、次々に説明してくれる。

やがて一行が到着した後、祝詞奏上などの神事が行われ、舞楽も奉納された。もちろん、東大寺の僧侶による法会も同時に行われている。

法要が終われば、次は秘仏開扉だ。

「貼り紙でも見たと思うけど、今日は転害会にあわせて、国宝の僧形八幡神像も特別に拝観できるの。勧進所の八幡殿という所よ。すぐそこだから、行きましょう。」

蘭さんは、今度は八幡殿に向かって歩き始める。説明も続く。

「僧形八幡神像を作ったのは、知っていると思うけど、鎌倉時代の仏師、快慶よ。

私、この快慶を好きで好きでたまらないの。大学の卒業論文は、快慶について、想像する人となりや作品に絡めながら書いたわ。去年の春、そこの奈良国立博物館で快慶展が行われて、各地から快慶の仏像が集められて……。夢の世界だった。

もちろん、ここの僧形八幡神もお出ましになられたわよ。あらゆる角度から見るように展示されていたのが、博物館ならではだったわね。でも、本来おいでになる八幡殿の中で、ひっそりお座りになっている八幡神像も捨てがたいわよ。

ああ、大好きな快慶の作品だから、あなたの拝観料なんて私が払ってあげる。さあ。」

快慶の仏像を見ることができるとあって、蘭さんはすでにトランス状態に入っているのだろう。二人分の拝観料1000円を受付で気前よく払い、八幡殿の方へ進んだ。

八幡殿の前には拝観目的の人たちが大勢並んでいたが、係員が次々に移動を促し、案外早く堂内に入ることができた。

僧形八幡神坐像は、僧侶の格好をしている。みごとな彩色が残っており、まるで肖像画のような、実に写実的な像だ。

パンフレットによると、金泥塗りという快慶が用い始めた技法によって、像の肉身在生身のように見えている。キラキラと光り輝く金箔を貼った像に比べて、周りから浮かない美しさだ。かつ、みごとな截金（きりかね）文様が施され、文字通り神々しさが感じられる。

後ろにはまだ順番待ちの列が並んでいたのも、それ以上の長い拝観は許されなかったが、仏像ファンの豊美にとっても有意義な見仏の時間だった。僧形八幡神像と同時に特別拝観となっていた阿弥陀堂の五劫思惟（ごこうしゆい）阿弥陀如来像、公慶堂の公慶上人像も拝観したが、快慶の作った像の神々しさには敵うものではない。

「神社の中には大抵、ご神体といって、神様が宿るとされて礼拝される物体があるわ。手向山八幡宮の場合は、元々は八幡様の画像が祀られていたのね。それが平重衡によって焼かれてしまった。

その後、重源（ちょうげん）というお坊さんが、東大寺全体を新たに造り直す命令を受けた時、八幡様の画像がなかなか手に入らなかったらしい。それで、信頼していた仏師の快慶に彫刻で再現してもらったという訳。」

「えっ、じゃあ、あの僧形八幡神像は、以前は手向山八幡宮の中にあっただけですか？」

「そうよ。」

「どうして、それが今は別の場所に移されているんですか？」

「神仏習合の逆というか、神仏分離って聞いたことあるわよね？」

「はい、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）とも言われている？」

「そうね。明治時代に神仏分離令が出された時、政府は神道を国の宗教とするために、神社と寺院をはっきり独立させたの。元々は仏教を排斥する意図はなかったけれど、その後、お寺や仏像が破壊された時期もあったわね。

神仏分離令ではご神体を仏像とすることも禁じられたから、お坊さんの姿をしている手向山八幡宮の僧形八幡神像も、東大寺側に移されたということよ。」

「へえ、そうだったんですね。でもそう考えると、明治時代より前は、今日の転書会みたいに神社とお寺と両方が舞台になって、神官さんとお坊さんが一緒にお祭りをするなんてこと、当たり前だったってということなんですね。」

「その通り。日本では今でこそ神社とお寺に別々にお参りに行くけれど、昔は一緒のことが多かったの。神仏習合って状態がとても馴染んでいたのね。」

「私、これまで仏像ばかりカッコいいと思って見てきたけれど、神仏習合の世界も面白そう。」

「面白いわよ。」

で、日本にたくさんある神様の中でも、最初に仏様と習合したのは、八幡神と言われているわ。それもその舞台は、今日の転書会に関係した宇佐八幡よ。」

「わあ、九州の宇佐かあ。宇佐神宮ってポスターで見たことはあるけど、一度行ってみたいです。」

「行く？」

「えっ？」

「大分県の宇佐市はね、東大寺と宇佐八幡の関係から、奈良市と友好都市になっているの。去年の11月には神輿フェスタといって、奈良時代に宇佐八幡神が東大寺に招かれて転書門を通過して大仏にお参りした、その歴史を再現するお祭りが、ここ東大寺で開かれたわ。」

今度の10月27日の土曜日には、東大寺サミットが、今度は宇佐神宮であるの。東大寺サミットは、東大寺と関わりの深い全国14の市と町が毎年つどって意見交換会をしている。今年の宇佐でのサミットは、宇佐神宮が祝詞をささげて、東大寺側が八幡神の前で読経をするという時間もあるの。

ねえ、一緒に行きましょうよ。」

「行きたいけれど、一応、親の了解をもらわないと・・・」

「そうね。そういえば、あなたのお名前も聞いていなかったわね。」

「ロマン豊美、中学3年生です。」

「あら、学校をサボって転書会を見にくるほどの仏教オタク？」

「いえ、今日は体育祭の代休で、もともと休校なんです。」

「そう。で、とよみさんって、『豊』と『美しい』っていう漢字？」

「はい、そうです。」

「じゃああなた、大分県に行くのにもってこいの名前だわ。大分県は、昔は豊後の国と豊前の国から成っていて、今でも『豊の国』としてアピールしているから。」

「あ、そうなんですか。」

「ロマンっていう名字は、お顔から拝見すると、ハーフの方？」

「はい、イタリア系です。ロマンは片仮名で書きます。」

「大分県は、『ロマンのある豊の国』っていうキャッチフレーズも使っているから、本当にあなたは大分への旅にピッタリね。」

そう言われて豊美は悪い気はしないが、どうも蘭さんに上手く乗せられているような感じがしないでもない。

「あのう、蘭さんのお名前は、愚鈍蘭さんってことでしたよね。ラングドン教授の出てくる小説みたいに、一緒に旅行していると殺人事件が起きたりはしませんか？」

豊美は、おそるおそる尋ねてみる。

「あはは、それはない。絶対にないから、心配しないで。

とにかく、宇佐に行くスケジュールが決まったらお知らせするから、連絡先を教えてください。」

蘭さんは、そう言いながら、メモを取るためにスマートフォンを取り出した。

二. 宇佐神宮参拝

こうして、10月27日、豊美は蘭さんと日帰りで宇佐を訪問することになった。

豊美の両親はどちらかというと放任主義で、危険なこと以外に豊美の行動を規制することはない。蘭さんからは、豊美だけでなく豊美の両親にもメールで旅の計画が連絡されたようで、豊美の宇佐行きはあっさり許可された。

必要な交通費などはあらかじめ蘭さんから明示されており、事前に両親が蘭さん宛て振り込んでくれたようだ。おかげで、豊美はお小遣い程度のお金を財布に入れてただけで出発できる。

ああ見えて蘭さんは意外と用意周到で、きっちりした面もあるようだ。実際に会ってあの話しぶりを聞かなければ、社会的信用は高いと見える。

蘭さんは、京都だか大阪だかどうも奈良以外の関西圏に住んでいるらしいが、詳しいことは教えてくれない。でも、当日は車で奈良の豊美を迎えに来て、大阪の伊丹空港まで一緒に行ってくれるという。日帰り旅行で時間を稼がないといけないから、大分へは飛行機を利用するそうだ。

きっと蘭さんは、まだ薄暗いうちから家を出て、豊美を迎えにきてくれたのだろう。二人が空港に着いて、8時35分発の飛行機に搭乗する時、蘭さんはフワッと大あくびをした。

「私のために、朝早く起きてくれたんですね。ありがとうございます。」

「ううん、違うの。飛行機に乗るから、思いきり酸素を吸い込んだだけ。」

蘭さんは、照れかくしからか、そう答えた。でもその後、豊美はその答えの本当の意味を理解することになる。

「ダン・ブラウンの小説では、ラングドン教授はエレベーターが駄目だったり、閉所恐怖症っていうことになっているでしょ。日本の愚鈍蘭さんの方、つまり私は、ちょっと高所が苦手だね。」

なんと、蘭さんは高所恐怖症だから、飛行機に入る前に深呼吸をしていたのだ。機内では二人並びの席であったが、当然のごとく豊美を窓側に座らせ、蘭さんはけっして窓の方に目を向けようとしない。

おまけに蘭さんは、何やらブツブツと口を動かし始めた。

「神仏習合の勉強に行くのだから、仏教の方はお経を復習しておかないと。」

そう、お経を唱えていたのだ。復習なんて言っているが、無事の到着を願ってお経が口に出てきたに違いない。どこまでも強がりな人だ。

秋晴れの良い気候なので、離陸後はほとんど揺れもせず、快適な空の旅だった。それでも高所恐怖症の蘭さんを気遣って、リラックスさせてあげようと、豊美は話しかけた。

「ラングドン教授は、ツイードのジャケットがお気に入りですけど、蘭さんは特にこだわっていないんですね。」

蘭さんは、ベージュのニットカーディガンを着ているからだ。

「うん。でも、ツイードは着ないけど、ツイートはするわよ。」

そう言って蘭さんはスマートフォンを起動させて、自分のツイッターのページを開いてくれた。ツイードではなくツイートなんて、笑うほどのギャグではない。

しかし、ちょっとツイッターを覗き込んでみると、何やら博物館情報が呟かれていて、それなりの数のフォロワーを獲得しているようだ。蘭さん、なかなかのやり手である。

「ラングドン教授は、それから、ミッキーマウスの腕時計も必ず身につけているけれど、蘭さんはそうではないんですね。」

蘭さんは、腕時計の類を全くまもっていない。

「そうね、一度、夏に腕時計のベルトにかぶれて以来、しなくなったわね。まあ今は日本中どこでも時計があるし、私も携帯電話は必ず持ち歩いているから、それで時間は確認できるし。」

それもそうだ。

「でも、ミッキーマウスの腕時計じゃなくて、スヌーピーのハンカチなら必ず持っているわよ。ねえ、さだまさしさんの昔のヒット曲、『雨やどり』って知ってる？ 一緒に雨やどりをすることになった素敵な男の人が濡れていたの、買ったばかりのスヌーピーのハンカチを貸してあげたって、歌詞に出てくるのよ。

その主人公の女の子は、その人にもう一度逢わせてくださいって神様にお願いするんだけど、苦しい時『だけ』の神頼みだと正直に言ってるの。神様に失礼よねえ。」

確かに、これから行く宇佐神宮の神様には聞かせたくない歌詞だ。

「でね、この曲がヒットしたからか、さださんは『もうひとつの雨やどり』って替え歌も作ったの。そちらの方では、娘は器量が良いというだけで幸せの半分を手に行っているって、意地悪な歌詞も出てくるのね。

豊美ちゃん、あなたは器量が良いから得だわね。羨ましいわ。」

と、蘭さんはやや言いがかりもつけてくる。豊美はハーフだから、器量良しのように見えるかもしれないが、世間のレベルからすれば大したことはない。

でも話していて、蘭さんが快慶の大ファンであるだけでなく、さだまさしさんもすごく好きなことは分かった。

そんなこんなをおしゃべりしているうち、飛行機は無事に大分空港へ着いた。空港から宇佐神宮までは直通のバスがあるとのことだが、出発まで少し時間があるので、空港ビルを二人でうろついてみる。

到着ロビーでまず目に入ったのは、ヒノキ製という足湯。靴下やストッキングを履いたままでも足をつけられるように、ビニールまで準備されている。さすが、『おんせん県』を自称する大分県だけある。が、「帰りの飛行機に乗る前に旅の疲れを癒そう」という蘭さんの意見にしたがって、今はお預けだ。

二階のお土産物屋をのぞいてみると、季節の農産物が美味しそう。カボスという、ちょうどスダチを大きくしたような柑橘が、3個ずつネットに入れられて売られている。何でも、焼いたサンマに絞るのが最適だそうだ。ほかにも、干し椎茸は出荷量が全国一だと宣伝が書かれている。

大分県の銘菓としては、『ざびえる』という南蛮菓子がどのお店もイチ押しのようだ。

「私は福岡出身なんだけど、まだ子供の頃、大分の人から我が家に『ぎびえる』をいただいたことがあるわ。この別珍生地の箱が素敵で、中身のお菓子を食べた後、箱を宝物入れにしていたのを憶えてる。」

蘭さんは、見本の箱の表面を撫でながら、昔を懐かしんでいる。ちなみに今時、世の中は別珍なんて言わない、ベルベットかピロードだ。

三階のレストランフロアでは、大分の食材をふんだんに使ったご当地グルメが取り揃えられている。豊美が事前にガイドブックで予習していたように、『だんご汁』と『とり天』は、どこも外せないメニューのようだ。デザートには、『やせうま』も。

二人は、宇佐に向かう前に一息つこうと、カフェに入ってカボスジュースを注文した。おそらくはレモネードのレモンをカボスに置き換えただけの飲み物なのだろうが、カボスの酸味が新鮮で、脳を活性化してくれたようだ。

やがて二人は、中津方面行きの空港バスに乗り込んだ。宇佐神宮の前まで、ちょうど一時間くらいらしい。

バスは最短距離を進むのか、国道ながら山あいのコースを走り、いい塩梅に揺られた蘭さんは気持ち良さそうにウトウトしていた。朝早く起きて豊美を迎えに来てくれたのだから、致し方ない。

それでも、豊後高田市を過ぎて宇佐市に入る頃、蘭さんはむっくりと目を覚ました。そして、「とうとうUSAまで来たわ。」と感慨深げに話しかけてくる。

アメリカ合衆国までやって来たなんて、たぶん蘭さんはまだ夢の続きを見ているのだろう。そう思って豊美が応じずにいると、

「USAよ、USA。」

としつこい。

「あの、ここは宇佐ですけど。」

と豊美が答えると、

「USAで宇佐、でしょ。」

と蘭さんは同意を求めてくる。何だ、そんなギャグか。

そしてとうとう、二人は宇佐神宮前のバス停に降り立った。同じバスから降りたのも20名くらい、今日は東大寺サミットがあるということで、駐車場にも次々に車が入っている。辺りにも人は多い。

「さあ、私達も行きましょうか。」

蘭さんに促され、豊美は境内へ向かって歩き始めた。

「ええっと、まずは宇佐神宮について、ざっと説明しておくわね。宇佐神宮は、全国にある八幡様の総本宮、つまり大元の神社よ。

『八百万（やおよろず）の神』って言葉の通り、日本にはたくさんの種類の神様がいますが、神社の数が一番多いのは八幡様。全国で四万以上の八幡宮があるわ。ハチマン（八幡）なのにヨ

ンマン（四万）なんて、変だけどね。」

「あはは。」

豊美は、思わず笑ってしまう。大したギャグではないと思うが、こうやって説明されると、なかなかどうして、内容が忘れられない。蘭さんは案外、人気の予備校講師にもなれると思う。

「八幡神っていうのは、応神天皇のこととされているわ。それから比売大神（ひめおおかみ）と神功皇后も加わって、今の宇佐神宮では、この三人の神様が祀られているの。」

二人は仲見世と呼ばれる商店街の前を歩いて、表参道の方へ進んだ。東大寺サミットがあるためだろう、今日だけ特別に立てられたようなテントの下にもお土産物屋や観光ブースができてい

川にかかる橋を越えると、これもポスターなどでよく見かける大鳥居が目に入ってきた。流行りの言葉でいうところの『パワースポット』として宇佐神宮が紹介される際に、よく使われるアングルだ。足元で踏みしめる白砂利に対して、鳥居の朱色が目にも清々しい。

これは八幡神に限らないと思うが、鳥居の真ん中は神様が通る場所だから、左右のどちらかに寄って鳥居の下をくぐると良いそうだ。豊美は、きちんと気をつけて通り過ぎる。

「この右側にあるのは、宝物館。『孔雀文磬（くじゃくもんけい）』っていう国宝の仏具などが展示されているわ。」

「えっ、神社なのに仏具？」

「そう、読経の合図などに使う道具よ。言ったでしょ、どこまで行っても、宇佐は神仏集合なの。」

「へえ。」

やがて、左手に手水舎（てみずしゃ）が見えてきた。

「ちゃんと清めてから、お参りしましょう。」

と、蘭さんが歩み寄る。

「これは宇佐神宮に限ったことではないけれど、柄杓の水で右手・左手を清めた後、直接、柄杓に口をつけないようにね。『手水』っていう言葉の通り、左手に受けた水で口をすすぐのよ。」

このことについては、豊美も京都の神社を参拝した時から注意している。蘭さんを見ると、ラングドン教授が持つミッキーマウスの腕時計ならぬ、スヌーピーのハンカチで手を拭いている。

「さあ、上宮（じょうぐう）に行きましょう。宇佐神宮は、上宮という場所と下宮（げぐう）という場所それぞれに、三人の神様を祀っているの。その上宮も下宮もお参りしなければ、『片参り』といって、不十分な参拝になると言われているわ。」

まずは、上宮よ。」

そう言って、蘭さんは参道を左に曲がる。辺りは鬱蒼とした深い森が始まり、小高い丘の頂上へ向けて参道が続いている。かなりの登りであるから、歩くのが大変な参拝者のためにモノレールも設置されている。

豊美は、蘭さんと並んで、森の中の石畳を登っていく。木々によって日差しが遮られているから、空気はひんやりとしてきて、本当に神様の元に近づいているようだ。

「この辺りの木は、国の天然記念物にも指定されているのよ。」

所々に見える木洩れ陽が目優しい。

すると突然、蘭さんが叫んだ。

「あ、これよ、これ。夫婦石。」

見ると、似たような三角形の石が、並んで石畳にはめ込まれている。

「夫婦やカップルは、手をつないで左右の石と一緒に踏むと、幸せになれるんだって。独身だったら、両足で二つの石を踏むと、ご縁が舞い込むって言われているわ。」

でもね、見て。単なる三角形の石よ。長崎のグラバー園にあるハート形の石と違って、見つけにくいじゃない。私、前に宇佐神宮に来た時にこの夫婦石を見逃してしまったから、ご縁に恵まれなかったのよ。」

蘭さんは、何やら息まいているようだ。参道を登ってきて息が上がったからなのか、以前に夫婦石を見つけられなかったことを恨んでいるからなのかは、判別できない。

やがて朱色の門を抜けて、坂を登りつめたところに、上宮があった。大鳥居とともに、ポスターなどでよく見かける朱色の建築物だ。

二人は、正面の参拝場所へと向かう。

「ああ、これが国宝の本殿なんですね。」

「違うわ。」

「えっ。」

「そう、皆よく間違えるの。ここで皆お参りをして写真も撮るけれど、これは勅使門よ。国宝の本殿は、この門の向こう側。ずっと回廊に囲まれているからちょっと見えにくいけれど、こちら側からなら割と見えるわ。」

そう言って、蘭さんは来た方にやや戻り、勅使門の正面に対して左手から奥の方を示す。

「ほら、檜皮ぶきの同じような屋根が二つ連なっているのが見えるかしら。あれが本殿で、国宝よ。八幡造っていわゆる建築様式で、手前の方が外院、奥の方が内院と呼ばれているわ。」

外院には御椅子が置かれていて、神様は昼の間はその椅子にお座りになっているといわれているの。内院の方には御帳台という柱と帳に囲まれた畳があって、夜に神様がお休みになる所とされているわ。

この八幡造が三棟横に並んでいて、正面左手から順に一之御殿、二之御殿、三之御殿で、それぞれ応神天皇、比売大神、神功皇后をお祀りしているのよ。」

「へえ、そうだったんですね。でも、あの朱色の勅使門が国宝だと思ってる人、全国でも多いと思います。」

「そうね、参拝者から本殿はよく見えないから、勅使門のところでお参りして終わりだからね。」

『徒然草』に、石清水八幡宮に行った仁和寺のお坊さんが、山頂の本殿を見ずに、ふもとにある付属の神社などだけお参りして帰ったって話があるでしょ。石清水八幡宮も思わせぶりの作りになっているけれど、宇佐八幡も似たような感じよね。

兼好法師が『先達はあらまほしきことなり』と綴っているけど、豊美ちゃんは私っていう先達がいって良かったわね。えへへ。」

蘭さんは自画自賛しているが、確かにその通りだ。

「私たちもお参りしましょう。」

そう言って、蘭さんは再び勅使門の方へ向かう。お参りする壇は三つあり、真ん中が一番大きな門なので中央でお参りするのかと思いきや、蘭さんはまず、一番左の壇に向かう。

「やっぱり一之御殿から順番にお参りしなきゃ。」

蘭さんは、お賽銭を上げるべく、財布を取り出している。

「宇佐神宮の作法は、二拝四拍手一拝よ。つまり、二回礼をして、四回手を打って、また一回頭を下げるのね。」

日本の神社は、二拝二拍手一拝が多いけれど、宇佐神宮の二拝四拍手一拝は出雲大社の作法と同じね。私、最初に出雲大社に行った時に、そのお作法を忘れていたの。だから、縁結びの神様のご利益がなかったという訳。」

蘭さんは、夫婦石のことといい、出雲大社のことといい、己の身の越し方をすべて神様のせいに行っているようだ。

一之御殿、二之御殿、三之御殿に対してお参りを済ませた二人は、今度は下宮へ向かうことにした。森の中の道を下って進む。

下宮も上宮と同じように三つの祭壇があり、向かって左手から順に二拝四拍手一拝を繰り返した。

「合計、六回もお賽銭を上げなきゃいけないのよ。初詣の時なんて、神様、とっても儲かるでしょうね。」

蘭さん、そんなことを口にするから、縁結びをはじめとして神様は願い事を叶えてくれないのではないですか。

「無事にお参りも済んだわね。じゃあ、弥勒寺跡の方に行きましょうか。」

「弥勒寺？」

「ええ、こっちの方よ。」

蘭さんが進む方向は出口に向かう参道から外れているので、ほとんど参拝客は通らず、境内の中でも寂しげな場所だ。

「昔、神仏習合の時代は神社の中にお寺が建てられて、それを神宮寺っていうの。宇佐神宮の神宮寺は、弥勒寺だったのね。」

「あ、東大寺の中に手向山八幡宮が立てられた、その逆パターンですか。」

「そうね。それくらい以前の日本では、神社と寺院の結びつきが強かったと言えるわね。」

弥勒寺跡には遺構を示した碑が作られているが、辺りは単なる空き地のようになっていて、寺院があった面影はどこにもない。

「ここにはね、当時は奈良の薬師寺と同じ規模の大きな伽藍があったそうよ。金堂、講堂という建物のほかに、東塔と西塔と二つの塔もあったらしいわ。」

大仏建立の時に宇佐八幡が協力したお礼にということで、この弥勒寺を作るのに聖武天皇も大いに援助したのね。」

宇佐神宮の建物だけでも立派なのに、ここに薬師寺級の大寺院まであったとは、当時の宇佐は神仏ともに宗教中心地だ。

「でもね、明治の神仏分離令の後には、神社の中にあったこの弥勒寺も取り壊されてしまったの。」

弥勒寺にあった薬師如来像や弥勒菩薩などは放ったらかされていたんだけど、今では、すぐ近くにある大善寺と極楽寺に安置されているわ。

大善寺と極楽寺、行ってみましょうか。」

「わあ、宇佐神宮に来たのに、仏像も見られるなんて。」

「そうよ、でもその前にお昼を食べましょう。私、もうお腹ペコペコ。」

蘭さんにそう言われると、豊美にも一気に空腹感が襲ってきた。

「さあ、こっちを周って仲見世のお店に行きましょう。」

ほら、これは呉橋。屋根がついて面白い形でしょ。

勅使祭といって、今も10年に一度、天皇陛下の御使者がお越しになって、陛下からのお供え物を奉られる儀式が行われているわ。最後は、3年前の平成27年の10月。

その勅使がお渡りになるのが、この呉橋。普段はこうやって閉じられているんだけど、勅使祭の時だけは一般開放もされるのよ。」

「へえ、来年は天皇も代替わりになるし、そんな古式ゆかしいお祭り、見てみたいです。」

「そうよね。」

あら、ちょうどお昼になったわ。ごはんを食べた後は、大善寺と極楽寺に行って、14時から上宮で東大寺サミットの神事や読経があるから、また戻ってこなきゃ。

まずは腹ごしらえっと。」

三. 本地垂迹説（ほんじすいじゃくせつ）

仲見世まで戻った蘭さんと豊美は、一番大きい土産物屋兼食事処の『まるまさ』へと入った。

「どこでもお好きな席どうぞ。」

という店員さんの声で、二人は窓際にある畳の小上がりを選んだ。東大寺サミットも開かれている週末のお昼時、食事目当てのお客さんは次々に入ってくる。

テーブルの上の『お品書き』を見ていると、ああ、どれも美味しそうだ。

「やっぱり『だんご汁』かなあ。」

と、蘭さんは早くも決めた模様。大分名物の『とり天』定食とどちらにするか、豊美が迷っていると、

「『とり天』も食べたいわね。そうだ、こうしましょう。定食じゃなくて、二人とも『だんご汁』を単品で頼むの。それと、『とり天』の単品一皿をシェアしましょうよ。

だったら、両方とも食べられるでしょ。」

さすが蘭さん、妙案だ。

「デザートには『やせうま』も注文するから、楽しみにしておいて。」

店員さんがお茶を持ってきてオーダーを終えると、料理ができるまでの間、蘭さんはまた説明を始めた。

「ねえ、本地垂迹（ほんじすいじゃく）って言葉、聞いたことあるかしら。」

「はい、何となくの意味しか知りませんが。」

「難しい言葉だものね。」

本地垂迹っていうのは、神仏習合の思想の一つ。日本の八百万の神は、実は様々な仏が姿を変えて日本の地に現れた権現だとする考え方よ。」

「とすると、仏教が元々あって、神様がそれに付随して出てきたっていうことになるんですか。」

「そういうことになるわね。」

本地とは、本来のあり方のこと。垂迹とは迹（あと）を垂れるという意味だからね。それに、権現の『権』は臨時の、仮のという意味があるから、仏が神の姿をとって仮に現れたと言っている訳ね。」

「私の父はローマ出身なんですけど、ローマ神話もギリシャ神話を取り入れて、神々を同一視した経過があります。でも本地垂迹は、ちょっと仏教よりの考えに過ぎている感じがしますが・・・。」

「確かにそうね。」

日本に古来からある神々には、もともと明文化された教えなんてなかった。そこに仏教が入ってきて、お経をはじめとして体系化された教えがあったものだから、仏教の方が教義として優位に立つ時期も出てきたのね。神仏習合によって、神様もようやく宗教としての体裁が整えられたと

いうか。」

蘭さんは、一口お茶をすすった後、また続ける。

「でもね、神道の方にも神仏習合を大いに利用した理由があったわ。仏像における主尊（しゅぞん）・脇侍（きょうじ）・眷属（けんぞく）・護法仏（ごほうぶつ）の関係にならって、神社本宮と末社の従属関係を作り出すことができたりするからね。あるいは、本地仏と同様に神様も細分化して、お参りに来る人の様々な願い事に対応できると考えられたりしたから。」

「なるほど。持ちつ持たれつ、だったんですね。」

「鎌倉時代中期になると、逆に仏が神の権現で、神が主で仏が従うという反本地垂迹説も出てきたわ。特に、元寇、蒙古襲来ね。これ以降は、日本は神に守られている『神の国』だという思想も高まってきたのよ。」

「ふーん、神様と仏様も、くっついたり別れたり、くつつく中でも上下関係があったり、難しい間柄だったんですね。」

「神様仏様とはいえ、私たち人間と同じね。」

いや蘭さん、そこまで言い切っては罰当たりだ。

そこに、『だんご汁』と『とり天』が運ばれてきた。

「うわあ、美味しそう。」

「さあ、食べましょ。」

まずは、二人とも『だんご汁』からだ。

「え、『だんご汁』って、おだんごじゃなくて、きしめんなんですか？」

「違うわよ。大分ではこれがだんごなの。切り揃えられたきしめんと違って、大分のだんごは小麦粉を水で練ったおだんご状の生地を、ちぎって引きのぼして茹でたものよ。」

豊美は丼を持って、お汁を一口すする。

「お味噌汁のようだけど、野菜のだしも出ていて、とても美味しい。」

「でしょ。いろんな野菜に負けないよう、いりこ出汁がベースになっているんだけどね。」

具沢山の豚汁に麺を入れたような感じだが蛋白質は油揚げしか入っておらず、豚汁よりもっと素朴で、でも食べ応えがあるようだ。

「これこそ、私の名前にふさわしい食べ物ね。」

「って、どういうことですか？」

「具がたくさん入ったうどんみたいな物、ということで、具・うどん、すなわち私の苗字『愚鈍』ね。」

豊美は、ギャグのあまりのつまらなさに開いた口が塞がらないが、口を塞がないと『だんご汁』を食べられないので、頑張って閉じることにする。

「ほら、『とり天』も食べて。」

蘭さんは、何も気にすることなく、『とり天』が盛られた小カゴを豊美の方に押し出してくれた。

「このポン酢をつけて食べるのよ。酸味が足りないなら、もっとカボスを搾りいれてもいいみたいね。」

確かに、カゴには半分に切られたカボスも添えられている。

「ああ、あっさりしていて美味しい。」

「そうよね、それが『とり天』の美味しさよね。」

宇佐はね、からあげ専門店の発祥地とも言われていて、確かに鶏のからあげも人気だわ。だから、からあげのようにニンニクやしょうゆを効かせて、しっかり下味をつけた『とり天』もよく売られている。

でもね、大分県の本来の『とり天』は、ジューシーな鶏もも肉を他の料理に使った残りの鶏むね肉で作られていて、淡白なものなの。下味も、塩とお酒くらい。だから、ポン酢につけてスッキリさせて食べるというより、ポン酢で味付けをしないと薄味過ぎてってというのが本来の形らしいわ。」

蘭さんはそう言うが、豊美は肉汁滴るからあげよりも、こちらの『とり天』の方が好みだと思う。

ふと蘭さんを見ると、食べる途中に『だんご汁』や『とり天』の写真をとっている。どうもツイッターに上げるようだ。ラングドン教授が着るツイードに対して、やはり品格の点で敵わない。

それからまた『だんご汁』と『とり天』を頬張りながら、蘭さんは説明を続けた。

「本地垂迹の話の続きよ。」

奈良時代に宇佐八幡が東大寺大仏建立に協力したお礼からも、朝廷は宇佐八幡に『八幡大菩薩』の神号を贈ったの。その後、東大寺の僧形八幡神像のように、八幡神はお坊さん、すなわち地蔵菩薩に似た形で表されるようになったわ。

でも、さらに後、平安時代末期になると、八幡神だけでなく日本にあるそれぞれの神様に本地仏、つまり神に形を変える前の元来の仏というのが定められていったのよ。本地仏といっても、寺院や神社、それから宗派によっても少しずつ違いがあるけれどね。

八幡神の場合、以前は釈迦如来とされていたのが、鎌倉時代の浄土教の影響からか、阿弥陀如来として変化していったわ。日蓮宗では釈迦如来のままだけれど。」

「へえ。」

「この本地仏に関して、マニアの間では有名なエピソードがあるわ。」

奈良の山深いところにある室生寺というお寺、『女人高野』とも呼ばれているけれど、仏像ファンの豊美ちゃんは知っているわよね。」

「はい、国宝の十一面観音が有名で、私も行ったことがあります。紅葉の時期で、境内がとっても綺麗でした。」

「そうね。」

で、室生寺の金堂には、釈迦如来、薬師如来、地蔵菩薩、十一面観音、文殊菩薩が安置されているのだけど、何か変に感じなかった？」

「そうですね。言われてみれば、配置がちょっとバラバラな感じがします。普通なら、釈迦如来の脇侍には文殊菩薩と普賢菩薩、薬師如来の脇侍なら日光菩薩と月光菩薩が控えていることが多いですから。」

「そこよ、そこ。なぜ、釈迦如来、薬師如来、地蔵菩薩、十一面観音、文殊菩薩の五体なのかつ

てところ。特にこの釈迦如来は、元々薬師如来として作られたものを、後に釈迦如来として拝まれるようになったとされているし。」

「どうして、その五体なんですか？」

「実はね、この五体はちょうど、奈良市の春日大社に祀られている五つの神様の本地仏と一致しているのよ。」

「えっ。」

「何かゾクゾクするでしょ。ラングドン教授が小説の中で、専門の宗教象徴学を生かして暗号を解いた時のような感じでしょ。」

この室生寺の謎の方は、愚鈍蘭さん、すなわち私が解明したと言う訳ではないんだけどね。」

蘭さんは、ちょっと残念そうに言い訳している。

「なぜ室生寺に春日大社の本地仏なのか。」

それはね、室生寺は『女人高野』と言われるように、今でこそ真言宗だけれど、その昔、興福寺の末寺だった時代があるの。

で、興福寺の方といえは、近くにある春日大社との結びつきが強かった時代。春日大社は興福寺のそれぞれのお堂の本尊として祀られている仏様を本地仏として、それが釈迦如来、薬師如来、地藏菩薩、十一面観音、文殊菩薩の五体だったの。

真言密教に圧倒されつつあった室生寺が興福寺の末寺であることの証として、本寺の興福寺側が、春日五神の本地仏を安置して対抗したものと考えられているわ。」

「うわあ、面白い。」

「私の大好きな快慶が作った釈迦如来像にもね、光背に春日大社の五つの本地仏を表す梵字が刻まれているものがあるの。だから、今でこそアメリカの美術館の所蔵になっているけれど、元々は春日大社か興福寺に祀られていたと考えられているわ。」

「ふーん。」

豊美は、蘭さんに相づちをうちながらも、しっかり口は動かして、『だんご汁』と『とり天』をすっかり平らげた。蘭さんの方も、あれだけ喋っていたのに、元来が早食いなのか、『だんご汁』をもうすぐ完食の様子。

その絶妙なタイミングで、店員さんが『やせうま』を持ってきた。『やせうま』は、先ほどの『だんご汁』に入っていた麺が、ちょうど安倍川餅のようにきな粉でまぶされている。

「さあ、どうぞ。」

と蘭さんに勧められて、一口かじった豊美。

「あー、大好きな味です。」

「仏像ファンで、この味を嫌いな人はきつといないと思うわ。」

蘭さん、どこにその説の根拠があるんですか。

二人で『やせうま』を頬張りながら、蘭さんはまた本地垂迹の話が続けた。『やせうま』にまぶしたきな粉が蘭さんの口元について、蘭さんが喋るにしたがって少々周りに散っているの

だが、豊美は気にしないようにした。

「それでね、本地垂迹説が広まって一般民衆に普及するようになると、神と仏の関係を誰にでも分かるように表す工夫が作られたわ。

まずは、仏教の曼荼羅の形を借りて、習合曼荼羅、あるいは垂迹画とよばれる、本地垂迹を示す絵画が作られたの。その中には、神社の境内の様子が描かれて、絵画上に祭神の本地仏が示されている宮曼荼羅というものもあるわ。」

「へえ、曼荼羅、ですか。」

「たとえば、さっきも言った春日大社では春日宮曼荼羅というのが作られて、五尊の本地仏が描かれているわよ。

春日宮曼荼羅は、春日の神様とその本地仏を礼拝するための画像として作られているから、実際に奈良の春日大社まで行かなくても、それを拝めば参詣したのと同じご利益が得られるとされた。当然、宮曼荼羅はたくさん作られるようになったわね。」

「習合曼荼羅は、神社にお参りする代用品の役割も果たした訳ですね。

じゃあ、宇佐神宮も習合曼荼羅が多く作られて、本地仏の阿弥陀如来をはじめとする三体の仏像が描かれているんですか？」

「ん？ そういえば、宇佐神宮の習合曼荼羅は見たことがないわね。

宇佐八幡宮から分霊されて建てられた京都の石清水八幡宮、ほら、『徒然草』で仁和寺のお坊さんがやらかした神社ね、あそこには八幡神の本地仏の阿弥陀三尊が描かれた八幡曼荼羅がきちんと残されているけれど。」

「どうして宇佐八幡には曼荼羅がないんですか？」

「なぜだろう。豊美ちゃんに聞かれるまで、私も深く考えたことはなかったなあ。」

これまで豊美の質問に淀みなく答えてきていた蘭さんが、初めて戸惑いを見せた。

蘭さんはちょうど『やせうま』を平らげたところで、少し考えてみようとしたのか、お茶をすすった。蘭さんの口元についていた『やせうま』のきな粉は、ようやくそれで流され、豊美は少しホッとした。

「そう言われればね、宇佐神宮の本地垂迹に関して、もう一つ気になることがある。」

「それはなんですか？」

「御正体（みしょうたい）も残っていないわ。」

「御正体って？」

「御正体も、習合曼荼羅と一緒に、本地と垂迹の関係を視覚的に分かりやすく表現したものよ。御正体は、神の体を表すという鏡、あるいは鏡に見立てた板の表面に、本地仏を線で刻んだり、浮き彫りの本地仏を付けたりしたもの。吊り下げるために金具がつけられているものは、懸仏（かけぼとけ）とも呼ばれているわ。

御正体は神社の社殿で礼拝の対象になって、要は、神社で本地仏を拝ませた訳ね。習合曼荼羅と同じように、鎌倉・室町時代を通して盛んに作られたわ。」

「その御正体が、宇佐八幡にはないんですか？」

「ええ。」

元々は、福岡県の香春町という銅の産地で御正体が作られて、祭事の時に宇佐に運ばれたと言われている。でも、鎌倉時代になる頃の源平騒乱期に奪われてしまったらしい。

それでもね、いくつか残っていて良さそうなものを、一枚も見たことはないわね。」

「なぜなんですか？」

「どうしてなんだろう、変ね。

まあいいわ、とりあえず宇佐神宮の神宮寺、弥勒寺にあったという仏像を見に行きましょう。仏像をお参りできる大善寺と極楽寺をまわりながら、習合曼荼羅と御正体の件を考えましょうか。」

そう言って、蘭さんは豊美の分の支払いも済ませてくれた。

四. 弥勒寺の仏像たち

仲見世を出た蘭さんと豊美は、宇佐神宮境内を取り囲むように流れる寄藻川沿いの小道を歩いて、まず大善寺に向かうことにした。

途中、呉橋の前も通り、普段は通行できない橋を境内側からだけでなく、外部からも眺めることができた。呉橋の屋根は、境内にある社殿と同様の檜皮ぶきで、見事な橋だ。

「この橋の向こうの境内にあった弥勒寺についてね、宇佐神宮の神宮寺として作られた時の初代別当、つまり長官に相当するお坊さんは、法蓮という人だったと言われているわ。」

「へえ、ほうれん草と関係ある人なんですか？」

「ううん、ほうれん草とは無関係みたいよ。その法蓮さんが弥勒寺を統括するよう命じられた時に、当時の信仰にもとづいて、薬師如来と弥勒菩薩が金堂と講堂の本尊として祀られたらしいわ。」

で、その薬師如来が移されたのがこれから行く大善寺、弥勒菩薩が移されたのが極楽寺ね。」二人は、大善寺へと、そのまま川沿いに進んだ。

大善寺。現在は、曹洞宗のお寺。宇佐宮の弥勒寺の金堂にあった薬師如来坐像が神仏分離の際にここに移されて、国指定の重要文化財になっている。

蘭さんがお寺の人に声をかけて、二人は禅堂の中の仏像たちを拝観させていただいた。

薬師如来は坐像の状態の高さ2メートル80センチあるとのこと、なかなかの大仏だ。両脇には日光菩薩・月光菩薩が安置され、薬師三尊像となっている。しかし残念ながら、日光・月光菩薩は老朽化が激しい状態だ。

三尊像のほかに不動明王と愛染明王もある。つまりは、宇佐宮に弥勒寺が建立された奈良時代にさかんに拝まれた薬師如来を本尊とし、平安時代に隆盛を誇った密教の影響が多い堂内となっている。

ただ、薬師如来は寄木造で作られているから、鎌倉時代以降の作と考えられる。ということは、かつて宇佐宮とともに弥勒寺の仏像も戦火で焼失し、その後再興される際に、弥勒寺創建当初の金堂内を模して仏像たちも作り直されたようだ。

「立派な薬師如来ですね。」

「そうね。」

「でも、八幡神の本地仏である釈迦如来や阿弥陀如来は、どこにもないですね。」

「そうね。」

蘭さんは、考えごとをしているようで、返事が雑だ。何ともわかりやすい人だ。

「薬師如来の脇侍の日光菩薩と月光菩薩が、まるで宇佐神宮の本殿の外院と内院を表しているみたいですね。それぞれ、昼と夜を代表させているといった意味で。」

「豊美ちゃん、それ、面白い着眼点ね。」

今は、考えごとをしている蘭さんより、豊美の方が頭が冴えているようだ。

続いて二人は、大善寺から再び宇佐神宮の入口方面へ戻り、極楽寺へ向かった。

東大寺サミットが開かれているといっても、宇佐宮に関係するお寺までお参りに来る観光客は少ないようだ。大善寺周辺も、この極楽寺の辺りも、ほとんど人通りはない。

極楽寺は、浄土真宗本願寺派のお寺。弥勒寺の講堂の本尊であった弥勒菩薩が移されている。

弥勒仏は、極楽寺境内の収蔵庫で自由に参拝できるようになっていた。大善寺の薬師如来同様、大仏級の大きな仏像で、菩薩というよりは如来風の簡素なお姿で座っている。弥勒菩薩は、釈迦の死後、56億7000万年後に如来となってこの世を救うとされている仏であるから、ここでは如来の姿に彫られたのだろう。

蘭さんがあらかじめ連絡しておいてくれたこともあり、極楽寺では、國東さんというとても歴史好きなお住職に色々説明していただくという恩恵にあずかった。

極楽寺の本堂内では、綺麗なお姿の阿弥陀如来立像が祀られていた。こちらは直接弥勒寺にあったものではないが、やはり神仏分離の際に宇佐神宮内から移されたものらしい。

本堂裏の展示室には様々な文化財が保管されており、國東さんがひとつひとつ丁寧に解説してくださった。住職ご自身も、文化財の足跡をたどって北海道まで調査に出かけ、その結果を本にまとめていらっしゃるなど、奮闘なさっている。

「お若い人たちが宇佐の歴史に興味を持っていただいて、本当に嬉しいことです。以前は名古屋から女性の研究員さんがおいでになったこともありますし、特に最近の日本は女性たちの活躍が目覚ましいですね。」

と、國東さんは優しくおっしゃった。

「若い」という言葉に反応して、蘭さんは

「いえいえ、そのような・・・。」

と謙遜の表情を見せていた。しかし、ご住職は主に豊美の方を見て「若い」という言葉を発していらっしゃるのだから、また蘭さんが早とちりをしたように感じる。

丁寧に礼を申し上げ、二人は極楽寺を後にした。

「大善寺と極楽寺の他にもね、すぐ近所にある大楽寺と円通寺っていうお寺は、宇佐神宮と関係が深いと言われているわ。

大楽寺の方は、宇佐宮の大宮司の菩提寺で、重要文化財の仏像が七体も揃っているの。円通寺の方は、このお寺の創始者が宇佐神宮境内にある弥勒寺の復興に尽力したそうよ。

あまり時間がないので、今日はどちらも行くことはできないけれど。」

「どちらのお寺にも、弥勒寺にあった仏像は移されていないんですね。」

「残念ながら、そうね。それぞれ立派な仏像は安置されているけれど、弥勒寺にあったものではないわ。」

「じゃあ結局、弥勒寺に祀られていた仏像は薬師如来と弥勒菩薩が中心で、八幡神の本地仏となる釈迦如来や阿弥陀如来は、少なくとも弥勒寺内にはなかったということなんですね。」

「そういうことになるわね。本尊は薬師如来と弥勒菩薩とで変わらなかったそうよ。」

「宇佐神宮には八幡神以外に、比売大神と神功皇后もお祀りしていたけれど、こちらの神様の本

地仏は何とされているんですか？」

「諸説あるけれど、比売大神が観音菩薩、神功皇后が阿弥陀如来と言われているわ。」

「でも、観音菩薩も阿弥陀如来も、弥勒寺内にはなかったんですよね？」

「そうね。宇佐神宮の三体の神様に対する本地仏を揃ってお祀りしたような気配はどこにもないわ。」

実際に仏像がつくられていないだけじゃない。お昼を食べながら話したように、釈迦如来と阿弥陀如来と観音菩薩を描いた習合曼荼羅も、はたまた御正体がつくられたとも聞いたことがないわ。」

「なぜなのでしょう？」

「なぜなんだろう？ 今回、豊美ちゃんに指摘されるまで、私も深く考えたことがなかったわ。あっ、でもそろそろ東大寺サミットの最後の行事、祝詞と読経が始まる時間よ。上宮まで戻らなきゃ。」

また歩きながら考えましょうか。」

そうして、二人は宇佐神宮の境内の方へ再び歩いて行った。

五. 宇佐の神仏習合

豊美と蘭さんは、東大寺サミットの出し物を見るべく、宇佐神宮の境内をもう一度上宮の方へと進んだ。同じように祝詞と読経を見ようという客も多いようで、初詣ほどではないと思うが、白砂利の参道には人の流れができています。

それでも清らかさを保つ境内の空気の中で、豊美は感じるところを蘭さんに話し始めた。

「仏像ファンなので、これまではお寺ばかり参拝していて、たまにしか神社にお参りすることはありませんでした。だから、宇佐に来るまでは神仏習合についても深く考えてみることはありませんでした。」

でもお寺と神社って、意外に共通点も多いですよ。まず参拝する側から考えると、お寺にも神社にもお賽銭を上げますよね。」

「神様にも仏様にも、本当は願いごとを叶えてくださったお礼に、お賽銭としてお米などを捧げていたの。今では、願いごとを叶えてもらうための前金としてのお賽銭になっているけれどね。」

蘭さんは、シビアに突っ込んでくる。

「参拝した後のおみくじも、神様のものと思われがちですが、時々お寺でも見かけますよね。絵馬も神社だけではなくて、受け付けているお寺も多いですし。」

「そうね。」

お守りも神社に多いけれど、お寺にも売られていることがあるし。神社からいただいて家にお供えするおふだも、お寺では護符と呼ばれているだけで、同じ物だわね。」

「それから、御朱印もありますね。私は仏像巡りばかりで御朱印帳を持ってもいないんですけど、お寺でも神社でも御朱印はいただけますよね。」

「そう、あとは神様にしろ仏様にしろ、霊験あらたかな場所は霊場として信仰の対象になっているし。」

昔は神社・仏閣の区別なく皆お参りしていたから、参拝の方法も一緒、つまり合掌だったのよ。今でこそ神社で柏手を打つようになっているけど、これは明治時代の神仏分離以後に定められただけなの。」

「へえ、そうだったんですか。」

「七福神なんて、神様も仏様もごちゃごちゃ。ヒンズー教や道教の背景も混じっているから、何でも取り入れていた日本人って、本当におおらかよね。」

「日本人の精神って、寛容だったんですね。」

「そう、緩かったの。」

と蘭さんは言うが、豊美からすれば『寛容』と『緩い』とでは、だいぶ意味合いが違うと思う。

そうこう話しているうちに、二人は上宮への石段にさしかかった。催しを見ようと、大勢の人で

辺りは埋め尽くされている。

そこへ、係員の人が駆け足でやってきて、

「中央を開けてくださーい、中央を開けてくださーい。」

と叫んだ。見ると、五名ほどの神官と、やはり五名ほどの僧侶とが、後方から一列に並んで歩いてきている。宇佐神宮の神官は、狩衣（かりぎぬ）に烏帽子（えぼし）、笏（しゃく）を持った格好、その後に法衣の東大寺僧侶たちが続いている。

「東大寺の転害会もそうだったけど、本当に神仏習合を絵に描いたような光景ですね。」

「そうね。神も仏も息づいているって感じ。」

蘭さんも、神官と僧侶の一行に見とれている。

「今日は東大寺サミットだから特別につくられた行列だけれど、いつも見られる訳ではないわね。

代わりに、神仏習合を表す宇佐神宮の年中行事としては、仲秋祭があるわ。神仏分離以前は放生会（ほうじょうえ）と言われていたものよ。」

「ニュースで『ほうじょうや』って言っているのを聞いたことがあります。」

「福岡の筥崎宮（はこざきぐう）ではそう呼ばれているけれど、一緒のものよ。今ではお祭りとなっているけれど、もともとは殺生を戒める宗教儀式ね。」

奈良時代、八世紀の初めごろ、南九州の隼人（はやと）が朝廷に対して反乱を起こした時、宇佐の人々は八幡神を神輿に乗せて反乱軍の制圧に協力したの。その後、隼人との戦いで殺生の罪を悔いた八幡神が仏教に救いを求めて、神仏習合の思想が成立したとされているわ。

東大寺の大仏建立を通して、神仏習合は日本の中央に広がっていったけれど、神仏習合の契機は放生会に凝縮されているって考えていいかも。」

「へえ。宇佐の放生会、今の仲秋祭はどんなことをするのですか。」

「十月の三日間、八幡神が海辺にある神社までお出かけになって、神職が浜に蜷や貝を放つ行事よ。蜷は満潮の時に放たれて、仏教の考えで引き潮とともに彼岸、つまりあの世へ送られるという訳。」

東大寺の転害会とは違って、神官と僧侶が同席する場面はないけれど、神仏習合の発端の再現行事ね。」

「宇佐って、本当に最初から神様と仏様が共存していたって感じですね。」

「そうね。」

「それだけ最初から宇佐の人々が神様に対しても仏様に対しても信仰が深かったなら、習合曼荼羅や御正体をつくって、わざわざ神仏をアピールする必要はなかったんじゃないですか。」

「確かに、そう考えられるわね。ずっと八幡神も慕われていた宇佐では、八幡神の本地仏が釈迦如来や阿弥陀如来ですって、わざわざ作り直してお参りに来た人に説明するまでもなかったはずよね。」

「神仏習合の初期に、八幡神が僧形、お坊さんの姿としてつくられた、それだけで宇佐では十分だったんですね。」

「宇佐は、奈良や京都のように日本の中心地ではないから、遠方からの参拝希望者もそこまで多

くはない。宇佐八幡の曼荼羅を作っても、流布をそこまで期待できなかった可能性もある。

でも、御正体も残っていないことを考えると、私は豊美ちゃんの説に賛成ね。宇佐では、それほどまでに神も仏も人々の心に浸透していたってこと。習合曼荼羅も御正体も、そもそも作る必要がなかったってこと。

豊美ちゃんの推理、すごいなあ。」

蘭さんは豊美を褒めてくれたが、ここまで考察できたのは、蘭さんが宇佐まで連れてきて色々知識を授けてくれたおかげだと思う。ラングドン教授が解き明かしたのがダ・ヴィンチ・コードなら、蘭さんが教えてくれたUSA・コードは『神仏習合』だ。

やがて一行が上宮に到達すると、転書会よろしく、神官が祝詞を奏上し、僧侶たちが神前読経した。係員の配ったパンフレットによると、東大寺の僧が宇佐神宮で法要したのは初めてとのこと。この東大寺サミットでは、特に世界平和を祈ったらしい。

「神様も仏様も仲良くお祈りできていて、神仏分離前は、日本は本当に寛容だったんだなって思います。」

「そうよね。」

まあ、もともと日本の神様は『八百万の神』っていうように、何でもありだった。仏教の方も日本に入って来た時は、既にいろんな種類の仏様が拝まれていたわ、原始仏教とちがってね。だから、どちらも一神教じゃないというか、習合しやすかったという面は確かにあるけれど。」

「他者を認める、多様性を受け入れるという優しさを、これからも大切にできたらいいですね。」

「本当にそうね。」

宇佐神宮の過去の歴史を見ると、けっして穏やかなものだけではない。例えば、和気清麻呂とご神託の話は豊美ちゃんも知っているわよね。」

「はい。弓削道鏡が天皇の位を狙ったときに、宇佐の八幡神のお告げで阻止することができたという事件ですね。」

「そう。時代が下って、源平合戦の時にも室町の戦国時代にも、宇佐宮は焼き討ちにあってる。神仏分離がなされて、この平成の世になってからは、今度は神社本庁との行き違いもあっているわ。」

「そのニュースは、聞いたことがあります。」

「八幡神は、隼人の反乱を抑えたことからよく戦の神様と言われるけれど、本当は神仏習合を真っ先に成しえたような寛容な神様だったと思うのね。」

宇佐神宮・国東半島を世界遺産にという市民運動があるように、もしこの神仏習合の精神が世界に認められたら、今も世界のどこかで起きている宗教戦争にブレーキをかけることが出来るだろうにね。」

「本当にそうですね、神仏習合を世界にアピールしたいですね。」

あ、でも蘭さん、その国東半島も世界遺産へというのはどういうことですか？」

「国東半島一帯にあるお寺の総称を『六郷満山』と呼んで、こちらにも神仏習合の文化が受け継がれているの。独特の山岳宗教文化で、今年、2018年は六郷満山の開山1300年というこ

とで、大分県をあげて宣伝しているわ。

せっかく宣伝するなら、大分出身のシンガーソングライター、南こうせつさんを起用するなりを考えたらいいのに。」

南こうせつさんが大分県出身であることを豊美は初めて知ったが、もっと若い人に宣伝効果をあげるなら、やはりサッシー、指原莉乃さんではないかと思う。

そんな豊美の逡巡に構わず、蘭さんは続けた。

「そう、夜の飛行機で戻る前に、近くにある大分県立歴史博物館へ行こうと思っているの。そこでは宇佐のことも、国東半島のことも、神仏習合がさらに学べるようになっているわよ。

歴史博物館には私の大学時代の同級生が働いているから、案内してもらいましょうね。」

六. 大分県立歴史博物館

宇佐神宮から大分県立歴史博物館までは車で5分ほどということで、豊美と蘭さんはタクシーで行くことにした。

向かう途中、蘭さんは、今度は神仏分離について語り始める。

「さっき見てきたように、宇佐って神仏習合の発祥ではあるけれど、だからといって神様と仏様が融合して一つになったという訳ではない、それぞれが独立したまま共存しているっていうイメージがしない？」

「そうですね。宇佐宮の境内にあった弥勒寺も、きちんと境界線を持った伽藍だったようですし。」

「そう。」

宇佐八幡からは、朝廷や幕府を護るという意味で、京都の石清水八幡宮、鎌倉の鶴岡八幡宮のように、当時の中心地に向けて神様が分霊されている。日本の三代八幡宮とも呼ばれているわね。

だけど、石清水八幡宮は僧侶が開いた神社で、境内は神社とお寺が一体化していたの。鶴岡八幡宮は、その石清水八幡宮からさらに勧請されて開かれている。

その点、宇佐では日本古来の神と、仏教とが、ここで出会って共存し続けたという感じかな。だからこそ、明治になって神仏分離が比較的早く完了したらしいわ。」

歴史博物館へ到着すると、蘭さんはすぐに入場券を購入した。中学生の豊美は無料だ。

蘭さんは、入場窓口の女性に説明し、勤務している同級生に声をかけてもらったようだ。50歳くらいの穏やかそうな男性が事務室から出てきて、二人を出迎えてくれた。

蘭さんはアラフォー、つまり40歳くらいと思っていたが、この男性と同級生ということは、本当は蘭さんはアラフィフ、50歳くらいだったのか。あるいは、この男性が老けて見えるだけなのか。

男性は、『葉井』と記された入館証を首から下げている。

「葉井（はい）君、お久しぶり。」

「いやあ、愚鈍さん。相変わらず若々しいですね。」

二人のやりとりからすると、蘭さんはやはりアラフィフらしい。貫禄がない気もするが、それもお愛嬌か。

「こちら、お話ししていた豊美ちゃんよ。」

「はじめまして、豊美です。」

「こちらこそ、はじめまして。遠路はるばる、宇佐へようこそ。」

「豊美ちゃん、この人、私と同級生の葉井君ね。葉井を英語にすると、イエス・キリストのイエスね。」

神仏習合の郷でイエス・キリストなんて、まったくふざけた人だ。

「葉井くん、私たち今、宇佐神宮の東大寺サミットを見て、大善寺と極楽寺にも行ってきたの。あとは、ここの資料を案内してちょうだい。」

それでは、ということで、葉井さんはまず常設展示からガイドしてくれた。常設展示は、大きく六個のテーマに分かれている。

まず、『生死・いのり』。ここでは、宇佐の先史時代の人々のくらしの様子が、縄文土器や土偶などで紹介されている。

次に『豊の古代仏教文化』。八幡神が登場する前から、この地域には19もの寺院が建てられており、豊かな仏教文化を有していたことがわかる。

そして『宇佐八幡の文化』。今日見てきた神仏習合について、改めて理解を深めることができた。

次は、『六郷山の文化』。国東半島に花開いた独特の仏教文化の成立と展開について解説してくれている。

次の『広がる仏教文化』では、県内の様々な時代の仏教美術が展示されている。大分県は、特に国宝の臼杵磨崖仏をはじめとする石造文化財が豊富なようだ。

最後の『信仰とくらし』では、身近な祭りや年中行事を通して、大分の人々の暮らしがしのばれる。

常設展示としては、ほかに、エントランスホールの正面に熊野磨崖仏のレプリカがある。熊野磨崖仏は大分県北部を代表する大型の磨崖仏で、博物館内では、山中の崖岩に彫り込まれた大日如来が展示されている。

また『富貴寺大堂の世界』と称して、九州最古の木造建築物である富貴寺大堂の実物大模型が、常設展示コーナーの中央にあった。平安時代後期の建築物を、最新の技術を使って、創建当初の壮麗な姿で再現している。内部には本尊の阿弥陀如来坐像も金箔の状態で見ることができ、周囲の極楽浄土壁画とともに極楽の世界が体験できる。

ほかにも、江戸時代末期から現在にかけて宇佐市安心院町周辺に続く、鍍絵（こてえ）も紹介されている。鍍絵は、左官職人が家や土蔵の壁などに漆喰で描いたものだ。

常設展示を見た後は、展望ロビーから『風土記の丘』を眺めた。『宇佐風土記の丘』は、歴史博物館周辺に広がる、前方後円墳を中心とした史跡公園である。四季の花々が咲き競う園内は、自由に散策することができるようだ。

展望ロビーの階下は図書室になっていて、蘭さんのリクエストで入らせてもらった。図書室には、歴史博物館の過去の展示図録をはじめ、大分県にまつわる参考図書、あるいは一般の図書館にあるような各種書籍が開架で並べられている。

蘭さんは、神仏習合について文献を探していたようだ。『神々の姿—あらわされた日本のこころ—』という図録を見終わると、突如、葉井さんに絡んでいった。

「ちょっと、何よ。『八幡大菩薩の世界』と『八幡信仰とその遺宝』の図録を置いてないじゃないの。」

「あー、ごめん、ごめん。僕らの事務室の本棚にはあるけど、こちらには残してなかったなあ。」

」

「苦労して特別展までやって、立派な図録まで作ったんだから、ちゃんと一般の人に公開できるようにしておかなきゃ。

あのね、今ね、人気の図録って古本屋さんでもとっても品薄で、手が出ないような値段がついているのよ。国会図書館でコピーサービスを受けるのだって、結構面倒なんだから。」

「愚鈍さんは、相変わらず手厳しいなあ。」

葉井さんが言っているところからすると、学生時代から蘭さんはなかなか指摘が鋭かったようだ。

「豊美ちゃん、もし博物館や美術館で気に入った展覧会に出会ったら、必ず図録を買っておくといいわ。図録ってね、高いものでも2000円くらいだけど、綺麗な写真が豊富で、信用できる中立的な解説文も丁寧に書かれているの。同じレベルの内容を、図録じゃなくて市販の本に期待すると、軽く一万円は越えると思うわ。」

私の大好きな快慶の展覧会、去年の春に奈良国立博物館であった時の図録、あれは永遠に私の宝物よ。」

勢いづいたか、蘭さんはさらに話し続ける。

「それから、葉井君、ここのホームページ、もうちょっと利用しやすいものにしてね。館内のフロアマップや、過去の展示紹介なんて、もっと検索しやすいように工夫しなきゃ。

どうせあなたがホームページを作っているんでしょ。」

「蘭さんには、敵わないなあ。改善いたします。」

葉井さんは、参ったなあという顔をしている。蘭さん、いつの間に歴史博物館のホームページもチェックしていたのだろう。

葉井さんは、やがて気を取り直したかのように、豊美と蘭さんを休憩室の方に案内した。そして、壁面の書架に並べていた六郷満山開山1300年に関するパンフレットを数種類取って、豊美に渡してくれた。

「時間がある時に、今度は国東半島の方を回ってみるといいよ。宇佐地域から広がった神仏習合について、さらに理解が深まると思う。」

また、愚鈍さんが親切に案内してくれるだろうね。」

そう言われてちょっと得意げな蘭さんの横顔を、豊美は見た。この人との次の旅も、きっと面白いものになるだろうなと思いつつ。

(完)

主要参考文献など

- ┆ 神も仏も大好きな日本人（島田裕巳著）（2011年12月10日発行、筑摩書房）
- ┆ なぜ日本人は神社にもお寺にも行くのか（島田裕巳著）（2017年4月23日発行、双葉社）
- ┆ 「神」と「仏」の物語（由良弥生著）（2016年5月20日発行、KKベストセラーズ）
- ┆ 八幡神と神仏習合（達日出典著）（2015年4月1日発行、講談社）
- ┆ 八幡神とはなにか（飯沼賢司著）（平成26年3月25日発行、KADOKAWA）
- ┆ 八幡大菩薩の世界（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編）（昭和61年10月25日発行）
- ┆ 神々の姿 ーあらわされた日本のこころー（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館編）（平成5年10月15日発行）
- ┆ 八幡信仰とその遺宝（大分県立歴史博物館編）（平成13年年10月18日発行）
- ┆ 新・宇佐ふるさとの歴史（大分県宇佐市）（平成27年3月31日発行）
- ┆ 週刊朝日百科 日本の国宝21（朝日新聞社）（1997年7月13日発行）
- ┆ 神と仏のいる風景（国立歴史民俗博物館編）（2003年2月25日発行、山川出版社）
- ┆ 神仏習合の本（2008年5月12日発行、学習研究社）
- ┆ ダ・ヴィンチ・コード（上・中・下）（ダン・ブラウン著）（平成18年5月20日発行、角川書店）
- ┆ 天使と悪魔（上・中・下）（ダン・ブラウン著）（平成21年4月25日発行、角川書店）
- ┆ ロスト・シンボル（上・中・下）（ダン・ブラウン著）（平成28年7月20日発行、KADOKAWA）
- ┆ インフェルノ（上・中・下）（ダン・ブラウン著）（平成28年10月20日発行、KADOKAWA）

l オリジン（上・下）（ダン・ブラウン著）（2018年2月28日発行、KADOKAWA）

l Wikipedia

l 華嚴宗大本山 東大寺 公式ホームページ

l 八幡総本宮 宇佐神宮 ホームページ

l 宇佐市 ホームページ

l 大分県立歴史博物館 ホームページ

l 雨やどり、もうひとつの雨やどり（さだまさし作詞作曲、いずれも）

USA・コード ～ 神仏習合

<http://p.booklog.jp/book/124764>

著者：小池楓生子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koikekaeko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124764>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト